

新発見！荻野吟子関係史料

飯能市立博物館 学芸職員 尾崎 泰弘

埼玉の三偉人といえば、塙保己一、渋沢栄一、荻野吟子の3人です。渋沢栄一は、近代以降では明治32(1899)年、大正2(1913)年の2回飯能にやっていますが、荻野吟子も明治8(1875)年の春頃に来飯しています。それは「妹」のように気にかけていた田中かく(子)が住んでいたからでした。

田中かくは、安政6(1859)年飯能の町に田中忠三、ひちの娘として生まれ、14歳の頃、東京在住の国学者井上頼圀の元で学びはじめました。そこで出会ったのが荻野吟子で、明治8年には同様に江戸で知り合った内藤ますの求めに応じて、甲府の女学家塾で教えていたようです。吟子はその後、東京に戻り医術開業試験に合格して日本で最初の公許女医の第1号となりました。

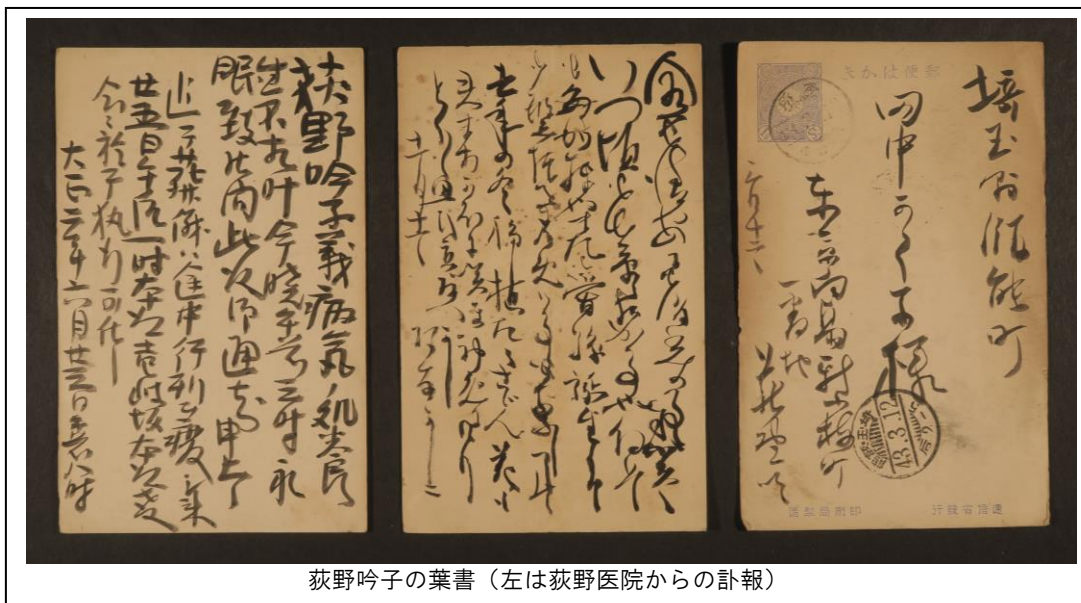
吟子とかくの親交は、現存する吟子からかくへの、32通の書簡や葉書が物語っています。これを見ると若い頃の吟子は、かくの勉学が進むよう心を尽くし、吟子が夫を亡くし、北海道から東京に帰ってきた時には、かくは娘や息子も含め家族ぐるみで晩年の吟子を気遣っていました。吟子はかくとの間柄を「姉妹のよしみ」と言っていたようですが、その言葉どおり、その交流は一生継続いたのです。

かくは、東京から帰ると家業を手伝い、下名栗から貞助を聲に迎えて創業に力を尽くしたのが「田中一誠堂」です。田中一誠堂は飯能を代表する老舗の本屋で、一定の年代以上の方は懐かしい思い出をお持ちの方も多いのではないのでしょうか。また田中一誠堂は、新聞を取り扱い、文具や本を売り、印刷業も営んでおりましたが、こうしたことはかくが東京や甲府で得た知識や経験が活かされていると考えられます。

今回新たに発見された吟子からかく宛の葉書2通や、荻野医院からの吟子の訃報などは、当館が令和4年度に購入した旧田中家所蔵と思われる資料群の中に含まれていました。そのほか、吟子の姉野口友子、養女の竹ノ谷トミといった親族、あるいは親友の荒川八重子やその妹柄内繁子などからのものもありました。これらは生前はもちろん、吟子の死後もその周辺の人たちとの親交が続いていたことを示しています。

【参考文献】

熊谷市『熊谷市史調査報告書 荻野吟子 -その歩みと出会い-』令和5(2023)年3月



荻野吟子の葉書（左は荻野医院からの訃報）